

家庭菜園の 病害虫

アマチュア
でもよく分かる
防除対策



第3回

キュウリ

前編：病害対策

大阪府立農林技術センター
草刈 真一

みずみずしい緑の果色とさわやかな味が決め手のキュウリは、たくさんの品種分化があり、それだけに病気に対する抵抗力も多種多様です。また、台木を用いて接ぎ木栽培を行うことなども考慮すると、栽培に対して的確な品種を選択することが何よりも大切です。的確な品種選びと病害防除、特に初期防除で病害虫の被害を最小限に抑えましょう。

栽培時期と病害対策

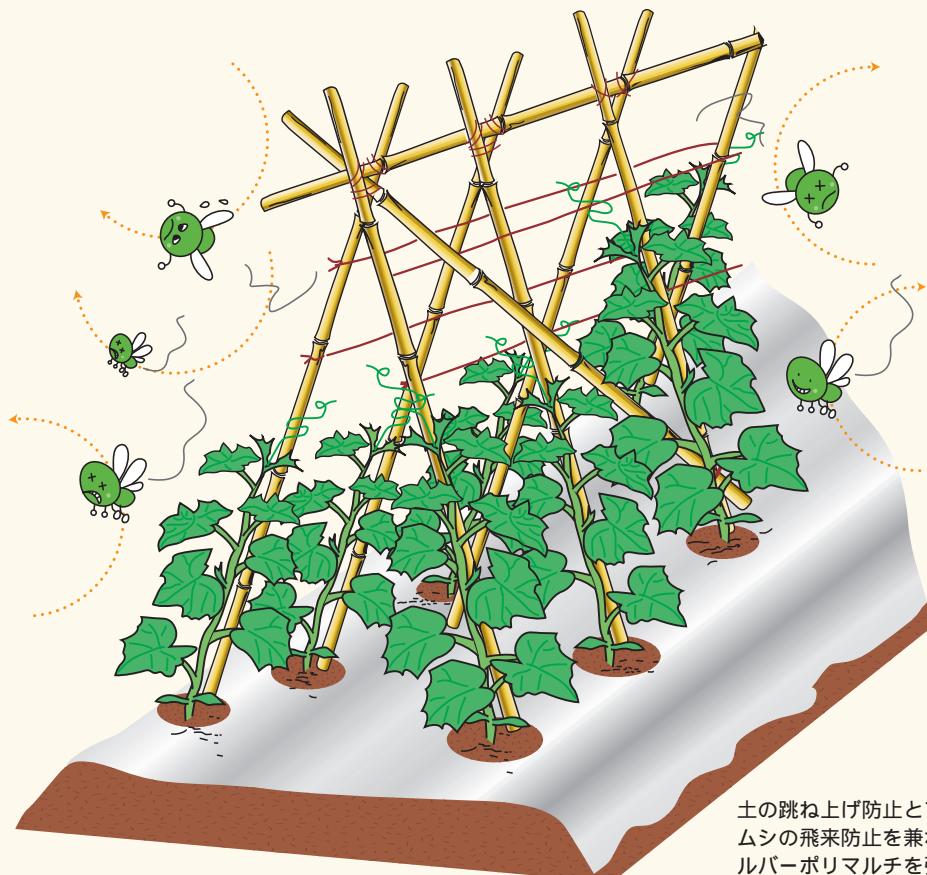
キュウリはウリ科の野菜で、春から秋にかけて栽培され、発生する病気も多いのですが、育苗期間を経過すると比較的栽培しやすい作物です。連作するところの割病などの土壌病害が発生しますが、接ぎ木栽培で被害を回避することができます。

キュウリには、果形や節成性（節ごとに着花結実する性質）などでたくさんの品種分化があり、また、病気に対する抵抗性も品種によって異なります。栽培時期や好みに合わせて品種を選ぶことが大切です。

因となる病原菌が生存していますが、キュウリはこれらの菌に弱いため、しばしば立枯病が発生するのです。土はできるだけ新しいものを用いるようにし、排水に注意しましょう。畑の土を使う場合は、土を焼いて消毒するかバーミキュライトなどの資材を播種床に使い、発芽後、育苗用土を入れたポットに移植します。なお、水のやりすぎは立枯病の発生を助長するので注意が必要です。

生育期間中の対策

（露地栽培 5月中旬～6月中旬）



土の跳ね上げ防止とアブラムシの飛来防止を兼ねてシルバーポリマルチを張るのには、モザイク病防除に有効な方法である。



播種から子苗時期には苗立枯病が発生します。土壤中にはピシウム菌やリゾクトニア菌など、立枯病の原因

播種から子苗時期には苗立枯病が発生します。土壤中にはピシウム菌やリゾクトニア菌など、立枯病の原因

育苗期・定植までの対策

（露地栽培 4月～5月中旬）

収穫期の対策

マルチをし、六をあけて苗を移植します。

<h3>収穫期の対策</h3>	(露地栽培 7~8月)
草丈が1・5m程度に繁茂して実が収穫できる時期で、いとんこ病べと病、炭そ病の発生が見られます。これらの病気は多発すると防除が難	

生は少ないのでアフリカのアフリカ病が発生する
飛来が多いとウイルス病が発生する
ので注意が必要です。

土の跳ね上げ防止のためマルチを張り、苗を移植する。



接ぎ木栽培

植物が弱り、収量が減少したり、枯れ上がりの原因ともなります。しかし、病気を見つけたら早めに防除します。病気が蔓延すると、接ぎ木栽培

A photograph showing a long, narrow aisle in a greenhouse. The aisle is covered with light-colored mulch. On both sides, there are rows of cucumber plants growing on black plastic mulch. The plants have large green leaves and some small yellow flowers. The greenhouse has a metal frame and a translucent roof. In the background, a person wearing a blue shirt is visible. There are also two signs in the foreground: one on the left with Japanese text and one on the right with English text.

病害を防ぐためには的確な品種を選択することが大切。
例えば「夏すずみ」は一般品種と比較して、うどんこ病に強い。



つる割病防除を目的に、カボチャ台木に接ぎ木することが有効である（写真の品種はブルームレス台木の「きらめき」）。

キュウリの栽培歴（露地）

：播種 ：定植 ：收穫期

キュウリの病害虫と症状

1-1 モザイク病



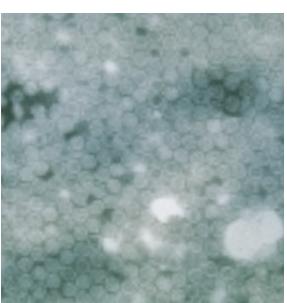
WMV (カボチャモザイクウイルス)による症状。激しいモザイク症状が見られる(中曾根渡原図)

1-2 モザイク病



CMV (キュウリモザイクウイルス)に感染したキュウリの成熟葉の症状。

1-3 モザイク病



CMVウイルス。たくさんある円形の粒子がウイルス(中曾根渡原図)

2 斑点細菌病



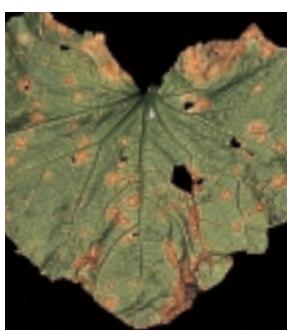
キュウリ斑点細菌病に感染した果実の症状。果実に褐色の病斑ができる、周辺部は水浸状となり病斑から粘質状の菌泥を生じる(元・大阪農技センター 田中寛原図)

3 うどんこ病



比較的初期の病斑状態。白色円形の病斑が多数できる。発生が進むと、葉全面が白色粉状の病斑で覆われる。

4 炭そ病



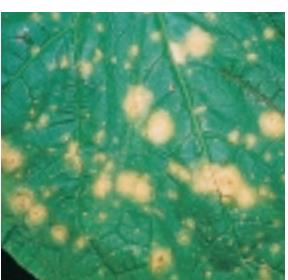
褐色円形の病斑が多数生じ、時間が経過すると病斑に穴があく。

5 べと病



角形で、やや黄色くなった病斑を生じるのが特徴。

6 褐斑病



淡褐色円形の病斑を生じる。4の炭そ病と類似するが、やや病斑の色が薄い。また、病変の中心部に目(小点)があるのが特徴。

7-1 灰色かび病



果実に発生した灰色かび病。果実が腐敗して灰色のかびに覆われる(元・大阪農技センター 田中寛原図)

7-2 灰色かび病



葉に発生した灰色かび病の病斑。水浸状の病変部が生じ、表面にかびを生じる。

8 菌核病



病変部に白色菌糸が蔓延し、ところどころにネズミの糞様の菌核ができる。

9 苗立枯病



子葉を展開した苗が次々と腰折れ状態となって枯死する。発芽前には病害すると、地中で種子が腐敗して発芽しない。

10 疫病



茎の地際部分があめ色に変色し、やや細くなる。地上部は、日中しおれるようになり、やがて株が枯死する(元・大阪農技センター 田中寛原図)

11-1 つる割病



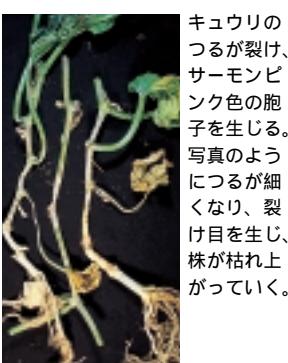
根から病原菌が感染し、発生すると、地上部が萎ちよう、枯死する。

11-2 つる割病



地際部を切断すると、維管束が暗褐色になっている。

11-3 つる割病



キュウリのつるが裂け、サーモンピンク色の胞子を生じる。写真のようにつるが細くなり、裂け目を生じ、株が枯れ上がっていく。

キュウリの病害虫の発生時期と特徴

病害虫名	発生時期・被害箇所												防除対策	
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
モザイク病 (CMV、WMV) (写真①参照)	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	害虫対策編(次回)を参照	<ul style="list-style-type: none"> 育苗期間中、寒冷紗をかけてアブラムシの飛来を防止することもできる 定植する時にシリバー・ポリマルチをするとアブラムシの飛来を軽減できる モザイク症状や葉に奇形の見られる株は早めに除去する
斑点細菌病 (写真②参照)													・カスミンボルドー ・オキシボルドウ	<ul style="list-style-type: none"> マルチ栽培にすると被害が軽減できる 例年発生の多い圃場では、早めに薬剤を散布して発生を防ぐ
うどんこ病 (写真③参照)													・トリフミン水和剤 ・ベルクート水和剤 ・カリグリーン	<ul style="list-style-type: none"> 病原菌の胞子は風などによって運ばれ伝染するため、近くにウリ類のうどんこ病が発生していると注意が必要 発病初期に薬剤を散布して防除する
炭そ病 (写真④参照)													・オーソサイド水和剤80	<ul style="list-style-type: none"> 淡褐色円形病斑が見られたら、早めに薬剤を散布して防除する
べと病 (写真⑤参照)													・オキシボルドウ ・オーソサイド水和剤80 (リドミルMZやサンドファンMで高い防除効果が得られる 農薬専門店、農協で入手できる)	<ul style="list-style-type: none"> 5月下旬ごろから注意して観察し、葉に角形の黄緑色の病斑ができたら薬剤防除する 毎年発病するようであれば、発病時期に薬剤を予防散布する
褐斑病 (写真⑥参照)													灰色かび病の薬剤で同時に防除が可能	<ul style="list-style-type: none"> 炭そ病とよく似た病斑ができるが、中心部に目のある病斑が特徴 早めに薬剤散布する
灰色かび病 (写真⑦参照)													・トップジンM水和剤 ・ベンレート水和剤	<ul style="list-style-type: none"> ハウスでは換気により湿度を低くし、また、冬季は加温すると被害が減る
菌核病 (写真⑧参照)													・トップジンM水和剤 ・ベンレート水和剤	<ul style="list-style-type: none"> 発病株を放置しない(病患部にできた菌核が感染源となる)ことが大切 被害の出る圃場では早めに薬剤散布する
苗立枯病 (写真⑨参照)													・オーソサイド水和剤80 ・プレビクールN液剤	<ul style="list-style-type: none"> 播種床や育苗用土には新しい土を用いる
疫病 (写真⑩参照)													・プレビクールN液剤	<ul style="list-style-type: none"> 5月中旬ごろからキュウリが萎ちようして枯死するようであれば、注意が必要 早めに薬剤を株元へ灌漑処理する(ジョウロで薬液を株元へかける)
つる割病 (写真⑪参照)													・土壤消毒には、ダゾメット微粒剤を土壤に混和してビニール被覆する 2回程度ガス抜きしてから作物を移植する	<ul style="list-style-type: none"> 連作すると多発するため、毎年発生するようであれば、栽培を避けるか土壤消毒が必要 カボチャを台木にした接ぎ木栽培にすると被害を回避できる